

水の源

2012.8
18

M I Z U N O M I N A M O T O

巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる
田舎にしかない力こそ、
現代に必要なエネルギー



フォークシンガー
高石ともやさん

フォトストーリー

寺泊山田 ^{まげもの} 曲物
新潟県長岡市

ウォークルポ

合併の大波を泳ぎ切れ！
『わいわいkiki』の挑戦
徳島県美波町

水源の里発 おすすめご当地グルメ

愛知県 豊根村「カンパーニュ、
ブルーベリーバル、パンデポント」

高知県 土佐町「ハッピークッキー缶」

和歌山県田辺市「大塔溪谷」

水源の里へ 思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちがお互いの暮らしや環境への理解や感謝が通い合ってこそ実現します。このコーナーでは、文化人・著名人に、そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。



聞き手：『水の源』編集長 町井 且昌
高石ともやさんの自宅にて

北海道雨竜町に生まれる。1966年、「想い出の赤いヤッケ」でデビュー。69年12月、学生運動・反戦運動と共に生きてきたフォークソングの終わりを決意し、ソロ活動停止。その後、5か月間アメリカ、カナダをひとり旅し帰国後、福井県遠敷郡名田庄村（現おおい町）へ一家で移住。
71年「ザ・ナターシャセブン」を結成。京都で活動を再開し、京都祇園祭宵々山コンサートを始める。85年、ザ・ナターシャセブンの解散により、宵々山コンサートも休止するが、87年より高石ともや・フォークソング・コンサートで全国コンサート活動開始。
今年（2023年）は第1回 ザ・ナターシャ・セブン Review！を開催するなど、現在も精力的に活動を続けている。

田舎にしかない力こそ、現代に必要なエネルギー

高石ともやさん

フォークソングは二人称の音楽だ

—— 住宅街にあって京都が一望できる、すばらしい眺めですね。

京都西山の東斜面にあります。京都市街の向こうが東山、左手に比叡山、右手には京都タワーも見えます。夏の大文字もよく見えますよ。

—— ここへ来る車中、「受験生ブルース」を聞きながら来ました。

ありがとうございます。あれは、あなたとボクと二人称の歌なんです。深夜放送で全国に広がりました。

—— フォークはラジオとともにありましたね。

そうです。二人称、つまり私とあなたの音楽会。「受験生ブルース」でも歌詞にやりとりがいっぱいありますよね。やりとりしながらやっている音楽会ですから。

—— 60年安保闘争の頃、高石さんは……。

ちょうど大学1年のときです。国会議事堂のデモに参加しました。酒を飲んでる場合じゃないって（笑）。デモで誰か死んだらしいと聞いたのもそのときです。あの頃が我々の目覚めみたいなものでしたね。

—— フォークは、高石さんたちのメッセージソングが先駆けだった。

ボクたちが引っ張ったと自負しています。その頃、ギターを抱えてレコード会社へ行った。すると、そんなじゃダメだと同期の歌手に叱られた。「そんな貧相な音は芸能じゃない」って。

こんなこともありましたよ。ボクは右耳がほとんど聴こえないんでバックの音に合せられない。だから、「自分で弾いて歌わせてくれ」と言ったが聞いてくれない。喧嘩をしながらも歌って、お客さんに「ありがとう」って言ったら、「生意気なことじゃ無い。それは司会者がいう言葉だ」って叱られた。あの時代、歌手はしゃべっちゃいけないんです。

—— 一番、思い入れの深いフォークといえますと。

「受験生ブルース」とか最初に歌った「想い出の赤いヤッケ」なんかですね。ボクが歌手になるきっかけになった「想い出の赤いヤッケ」はスキー場で覚えた歌です。大学5年（笑）のとき、大阪で開かれたフォークコンサー



トに飛び入りで歌ったのが人前で歌った最初です。

—— 「関西フォーク」へのこだわりは？

ボクは芸能界の人間としては珍しく、東京には一回も足を向けなかった。皆、プロダクションに入るじゃないですか。でもボクは入らなかった。プロダクションというのは、儲けなきゃならないから、儲けるためには何でもやらなくちゃならない。でも自分の信念を曲げるのはイヤだから自分でやっつけていこうと。関西で聴いてくれる人がいる限り関西にこだわろうと思ってやってきました。

宵々山コンサート

—— アメリカへ行かれたのは？

ボクは芸能界をやめて他の仕事をするつもりだったんです。1970年にアメリカへ行って、カリフォルニア大学の宗教学の教授の家に3か月ほど居候しました。そのとき会ったフォーク歌手が「フォークソングは文化ですよ。TVで一回に何万、何十万、何百万の人を相手にするのは文明です。あなたがやろうとしている、ギターを弾いて歌うのは文化です。われわれがカリフォルニアでやっているのも文化です。自分の同志と一緒に、信頼できるお客さんを相手に続けてやるのがフォークソングです」と言うんです。「文明」ではなくて「文化」をやろうと。

早速、カリフォルニアから京都の友人に電話をしてこの話をしたら、「これは面白い。当時から何でも“東京”“東京”になびいていましたから、よしわれわれは京都にこだわってやろう」ということになったんです。永六輔さんも賛同して、ぜひやろうということになりました。

—— それが祇園祭に合わせて開かれる宵々山コンサートですね。マネージメントはご自身で？

いや、京都にいた相棒がやってくれました。宵山と

というのはありましたが、宵々山というのはなかった。だから宵々山を作って、それを音楽のお祭りにしようと考えた。で、宵々山と言いだしたら、八坂神社の宮司さんが、「これ、登録しときなはれ！」(笑)と。

—— 宵々山というのは、昔からそういうんだと思っていました。

いや、宮司さんがいうには宵山だけ。一週間前も宵山だと。だからボクらが言葉を作ったんです。

—— コンサートは、去年もあったんですね。

去年が最後でした。途中で休みましたが、30回目でした。円山公園の野外音楽堂でやるので、誰か倒れたらどうしよう、赤字がドンドン増えて何百万円、何千万円になったらどうしようと、妻は心配ばかりしていました。

最後の年は一週間かけて、松尾大社やら黒谷の金戒光明寺やら、いろんな場所でやりました。いつも今ごろはその準備で大わらわだったんですが、今年は何か気が抜けたような気がします。70歳記念でやめましたから。

名田庄村での暮らし

—— 以前、福井県の名田庄村(現おおい町)にお住まいでしたね。

ボクが名田庄に来たとき、村長さんが「ここはいい村です。心根のやさしい村です。この村はこのままでいいのです。いまの良さがありつづけられれば、それでいい」とおっしゃっていた。それを聞いて、すぐここに住もうと決心しました。その後、かやぶき屋根の古民家に6年間、廃校あとの教室3つをお借りして7年間、合計13年間も名田庄村に住まわせていただきました。

—— 名田庄村では農業も？

いいえ、一切やりませんでした。ぼくの祖父からよく言われたんです。「農業を片手間でやっちゃいけない」って。ボクは歌のプロなんで。すべて歌で稼ごう



と考えています。でも京都に出てきてからは趣味で野菜を植えています。朝に抜いたばかりの大根をおろして熱々のご飯に添える。その贅沢はたまらんです。それが健康のもとですね。

—— 京都にはいつごろ？

一緒にやっていたマネージャーが事故で亡くなり、これはもう芸人をやめろというご託宣^{たくせん}じゃないかと。それで1985年にバンドを解散して、歌をやめるつもりで京都へ出てきた。そのとき桂米朝さんから電話があって、「今、新橋で飲んでるから、出て来い」って。そこで「歌やめるなよ」といわれて思いとどまった。米朝さんがいなかったら、ヤーメタと(笑)。米朝さんに勇気づけられて、一人でまた始めたんです。

—— ご家族の皆さんは名田庄での生活をどんな風に思っていたらっしゃったのでしょうか？

あの頃は、一家4人でよく遊び、よく笑いました。ボクにとっては通過点の13年のつもりでしたが、2人の子どもたちにとっては紛れもないふるさとだった。京都に引っ越す前夜のこと。当時小学校5年生の長男が言うんですよ。「僕らがいなくなったらこの家(廃校の校舎)すぐ壊されるんか？」と。それでボクが「引っ越したら、テニスコートになるらしい」と言うと、「そうか、帰るとこなくなるんや」とぼつり。「別にホンマのふるさとやないし」とボク。すると「ここは、僕の生まれた僕のふるさとやで……」と。ボクにとっては通過点。でも息子や家族にとって名田庄村は世界でただ一つのふるさとだったんだと、ボクはそのとき気づいたんです。

—— その頃に作られた作品はありますか？

教室3室、グラウンド付きで、家賃が月1,500円。



そんな環境で遊び、暮らした親子4人の生活。2人の子どもたちとの会話が紡いだ歌が1973年の「おひさまソング(田舎ぐらし)」です。歌詞を紹介しましょう。日は昇ってまた沈み ひと休みしてまた昇る 朝起きた寝床でまた眠る お日さまみたいさ わがくらし♪ 気負わずにありのままを歌にしました。懐かしいですね。

—— 名田庄村の生活で印象深いことは？

日々の生活の中で起こる様々な出会いやちょっとしたエピソードのすべてが思い出です。例えば、学校をサボって小浜から自転車为名田庄に遊びに来ていた若狭高校の4人組との出会い。毎日の買い物をすべて請け負ってくれた池永さん。保健婦さんちの野球好きのお兄ちゃん。42歳の厄払いの餅まきを手伝ってくれた

糞谷さん。春菜摘みを教えてくれた松原のおばあちゃん。そういえば、大工の門野さんと名田庄ランナーズを作ったなあー。村を走っていると、出会ったお年寄りが「ご苦労さん」と声をかけてくれましたね。生まれ育った北海道よりもたくさんの思い出があります。

—— 名田庄村での暮らしが高石さんの心の中に息づいているんですね。

そうです。京都に住む今も、不便な暮らしを楽しんでいます。面倒くさい生き方を丁寧に繰り返す事も大切です。便利なものや合理的な暮らしだけでは大切なものがなくなってしまう。私は不便な暮らしをしんどいとは思っていません。都市と田舎を比較して、どちらが優位だとか、喧嘩したりする必要はないのです。だってそれぞれに価値があるのですから……。田舎には田舎にしかない凄い力がある。そういう力こそ現代には必要な気がするんです。

インタビューを終えて

高石ともやさんは私と同じ60年安保世代です。日米安保条約改訂反対の市民、学生、労働者の大規模なデモ隊が国会議事堂を取り囲んだときわれわれはその渦中にいました。激しいデモにもまれ、次の時代を予感しながら。高石さんを先頭にフォークソングが、一世を風靡しはじめたのはそのころです。語り合うような「受験生ブルース」のメロディーは、今でも懐かしく思い出されます。インタビュー後、不躰にも一曲所望したら、高石さんはこころよく応じてくださいました。

Close-up 音楽会「ザ・ナターシャー・セブン Review！」のご案内

11枚組の名盤、107ソングブックをお手本に、高石ともやさんと城田じゅんじさんが、ナターシャー・セブンの足跡をたどる音楽会が開催されます。70歳を越えた今、二人を育ててきた107の歌たちに姿勢をただして向き合い、1曲1曲をたどりながら、ナターシャー・セブンの世界をもう一度組み立てる全4回の音楽会。第1回の開催は9月17日です(第2回以降の日程については未定)。

第1回 カーター・ファミリーのギターとハーモニーの響きを中心に
第2回 オールド・タイム・ミュージックの質素なパワーを中心に
第3回 60、70年代のフォークソングを歌って時代を辿る
第4回 バンジョーに夢中だったあの頃、ブルーグラス編

第1回 カーター・ファミリーのギターとハーモニーの響きを中心に

日時 9月17日(月・敬老の日)
(開場16:00、開演16:30)

場所 エル・シアター(大阪府立労働センター)
京阪・地下鉄谷町線「天満橋駅」西へ300m

前売 4,000円(全席自由) 当日/4,500円(全席自由)

主催 高石ともや事務所

チケット予約 e-mail takaiishi_office@yahoo.co.jp
FAX 075-492-9001(高石ともや事務所)

チケット発売 チケットぴあ(Pコード/172-402)

お問合せ 090-3037-4206(高石ともや事務所)

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されている。
このコーナーは、多くの先人によって継承されてきた匠の技を全国の皆さんに紹介。
今回は新潟県長岡市寺泊山田を訪ね、曲物の技術を守る若き師匠、足立照久さんにお話をうかがった。

技を深め父祖の地に生きる

まげもの 寺泊山田 曲物 新潟県長岡市

長岡市紹介



市域は山岳地域から海辺にまで至る、中越の中心都市。平成 17 年度の 9 市町村、同 21 年度の 1 町との合併により面積は 890km²、人口は 28 万人余りで県下第 2 位。自然も歴史も豊かで産業分野とのバランスがとれた魅力的な市。
市民協働・交流の拠点として、今年 4 月にオープンしたシティホールプラザ「アオーレ長岡」が話題を呼んでいる。



上／組立て前の曲輪の束
中／綴じられた半製品
下／自宅に掲げられた看板



11 代目当主足立照久さん 宿命を負って二足の草鞋

夏の日本海は思いのほか静かで、碧く光輝いていた。北前船の寄港地であった寺泊は、昔も今も中越地域の交通の要。佐渡との交易港であり、北国街道の要衝の地でもある。港には多数の漁船が舳っていた。

寺泊山田は、海沿いの小さな集落だ。ここを貫通する国道 402 号は、禅僧であり、詩人、歌人、書家としても知られる良寛和尚生誕の地、出雲崎に通じる。この道をはさんで自宅と工場が向い合う足立茂久商店の作業場におじゃました。

作業の手を止めない照久さん(38 歳)は多忙なのだろう。「目と手先は仕事を続けるが、耳と口はお相手する」と味のある人だ。その母・道子さん(66 歳)が何かときめ細かく対応してくれた。

驚いたことに、足立家は 2.5 ヘクタールの田んぼと畑を有し、農にも精を出しているとの

こと。取材中にも農業の師とする男性(3 年前に亡くなった 10 代目一久さんの親友)を訪ねてきた。2 人は熱心に農作業の打ち合わせをしていた。

「二足の草鞋ですわ」と照久さんは苦笑いした。しかし、多くの人々は農・林・漁の一次産業に従事し、冬の農閑期に民具づくりをするのが昔からの習わしであった。サラリーマン生活よりもこちらのほうが本来の人の生き様なのではないかと思われた。

地元の大学で理学部・地質鉱物を学んだ彼が、何故に家業を継ぐこととなったのか。「よく、その様に聞かれますが……」と笑いながらも「社会的責任があります」と応じてくれた言葉が印象深い。

分業進み、組立て中心となったが、材料こそ大切

かつては、地元の檜や杉で曲輪(厚さ数ミリ、幅数センチの薄板)を作るところから組立てまで



笑顔さわやか 足立茂久商店 11 代・足立照久さん

やる、一貫製造も行われていたが、社会的分業が進み、今では組立てが中心の仕事となった。

足立茂久商店の主製品は、節、裏漣、蒸籠などのいわゆる曲物なので、側板となる曲輪が中核の材料となる。作業場やその奥の倉庫には、入荷して包装されたままの曲輪の束や、規定寸法に綴じる直前の半製品までが散在していた。側板の檜は主として和歌山産で、奈良の業者から仕入れる。綴じひもとなる桜の樹皮も同じく奈良からとのことだ。

手作業の工程の微妙さは、ことばに表わすのは難しい。失礼

足立道子さん（左）と
客人の片桐さん（右）



修理を待つ篩など



科学技術長官賞を受けた電子レンジ用の蒸籠



試作品などを収めた陳列棚



先代の作品



を省みず簡略化すれば次の様になろう。①曲輪を狙いの径に曲げる②綴じ代を木鋏で固定する③綴じ代に目通で穴を開け、桜の樹皮ひもで綴じる④底板を竹釘でとりつけると蒸籠となり、底に網を張ると篩となる。

網の材料は今でも、馬毛、絹、真鍮。全工程中「網を張るのが一番むづかしい」とのことであった。

受注生産、直接納入、修理・張り替え

足立宅の表の一角に、大きな陳列棚が2つある。先代の一久さんは大変な時代に家業に勤しみ、新しい製品を開発してはいくつもの表彰を受けた。陳列棚に並ぶ、それらの製品・作品を見ながら道子さんの説明を聞いていた。そこに突然、ご婦人が一人、興奮気味に入ってきた。念願の品の実物にやっとた

どり着き、照久さんともお話ができたと言った。買い求められたのは、電子レンジに収まる小型の蒸籠であった。片桐さんとおっしゃるこのご婦人は、東京からご主人の出身地・長岡にリターンされ、伝統の品・民具を集めている人だった。

この様に、一般客への製品の販売が無いわけではないが、大半はあくまでも受注生産・直接納入であり、その用具を後々までケアし、修理することを旨としている。従って、納入先は主として料理屋や菓子屋となる。そう云えば自宅の一間に、修理を待つ篩がいくつ積まれていた。「修理は大変……できて一人前」と照久さんは口元を引き締めた。かつては「篩屋の郷」として全国に名を馳せ、昭和30年代には10数軒あった同業も、農業の機械化などによる篩の衰退もあって足立商店のみとなった。淋しい限りである。「将来は全国の同業他

社と交流したり、秋田や東京の職人さんと連絡を取り合ったりしたい。しかし、まずは身につけた技術を磨き、目の前の要望に対応してゆく」これは照久さんの堅実な覚悟だ。彼は若い。世は少しずつ和風への回帰も始まっている。将来の灯が見えている。

昼食後、ほど近い山裾にある十二神社にお詣りし一期一会に感謝した。この古社は山田集落の守り神であり、足立家の氏神だと思われた。

料亭「ゆめや」、弥彦神社……そして、嫁がくる

道子さん運転の車で寺泊を離れ、新潟市の岩室温泉「ゆめや」へ向かう。40分ほどの行程で、信濃川の豊かな流れや米どころの田園を眺めながら、彼女の話の聴いた。

一つは、農作業用の篩の需要が多く、かつては職人もかかえ

るほどで、米、糠、小米、種籾の篩が盛んであったが、コンバインなどの機械が米の稲架掛けや脱穀を追いやり、農用の篩は廃れたという。その通りで、極端な機械化は、良き伝統や技を壊してしまう。

二つ目は、亡き夫の一久さんが口癖のように云っていた「この国は山の国、木の国、それを忘れてはならぬ……」。これぞ正に、なんでもかんでもプラスチック製品を大量生産・大量消費・大量廃棄し、環境悪化を拡大する現代への警告といえよう。

「ゆめや」はその名の通り、広大な日本庭園に囲まれた風格高い料亭だ。清潔な広い調理場で、料理長の高野清一さん（40歳）が待っていてくれた。調理台の上に、大小の篩が置かれ、その場に親しんでいる。高野さんは、「さわり心地が良いし、作業になじむ」とおっしゃる。それもそのはず、「ゆめや」で25年、その前身も含めると40年ほど、修理を重ねながら使い続けているのだ。葛粉をふるったり、出汁を通したりすると云いながら、高野さんは愛しそうに篩を扱った。それから

しばらく、高野さんと道子さんは篩を囲んで話が弾んでいた。

「嫁さんがきてくれる」少し抑えた道子さんの声だが、嬉しさが滲んでいる。もちろん、長男・11代目照久さんの縁談成就のことで、秋には挙式だ。私も大変嬉しい。「水源の里」は、今なお嫁不足が深刻だ。この縁談は足立家のみならず、寺泊山田の集落にも慶事だろう。帰路に立ち寄った越後一宮の弥彦神社で、道子さんは何を祈ったのだろう。ご多幸を心よりお祈りします。

【取材・文：坂根千代忠】



「ゆめや」料理長・高野清一さんと
長年使用された篩など

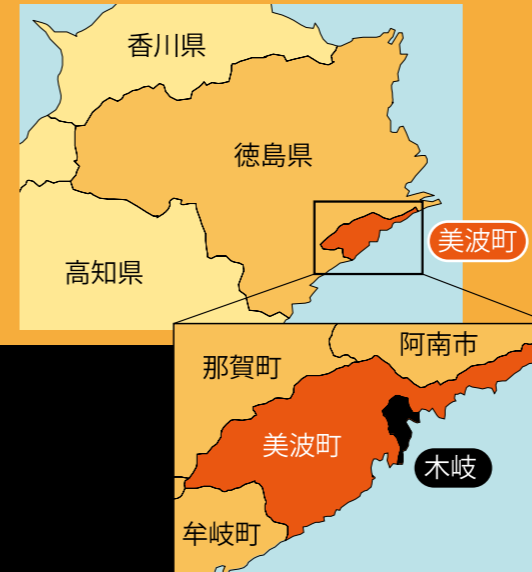


弥彦神社に詣で茅の輪をくぐった足立道子さん

豊かな自然のなかで営まれる「水源の里」の暮らし。そこには、都会には無い魅力があふれる一方、都市部からは想像もつかない苦勞もあります。このコーナーでは、そうした「水源の里」ならではの課題や取り組みにスポットを当ててレポートします。

合併の大波を泳ぎ切れ！『わいわいkiki』の挑戦

— 新生の町にいきいきした集落協働体を — 徳島県美波町木岐地区



美波町木岐地区はこんなまち

人口667人、面積23.16km²。高齢化率45.57%。南東は太平洋に望み、暖かい黒潮の良好な漁場を有する。古くから漁業が産業の中心。

ほうじょう 豊饒な海とともに生きる木岐の人々

徳島県美波町、木岐地区。大漁旗がはためく特設テントに、早朝から大勢の住民が詰めかけ、漁港はいつにない活況を呈する。水揚げされたばかりのアジや太刀魚、サザエ、アワビなどが、次々とお客さんの手にわたってゆく。地元で獲れた海の幸を地元で味わってもらおうと、まちづくり団体「わいわいkiki」が毎月第1日曜日に開催する「わいわい市場」は、漁師町に暮らす人々にとっても、新鮮な海の幸が浜値で購入できる希少なチャンスのようなのだ。

美波町は、平成18年3月31日に旧由岐町と旧日和佐町とが合併してできた人口約8,500人の町。木岐地区は、旧由岐町の6つの集落の一つで、旧日和佐町と境を接している。世帯数300弱、667人が暮らし

ている。漁村と農山村の生活文化が混じり合いながら歴史を刻んできた。現在は地区人口の減少に伴い、高齢者比率は45%に達し、木岐小学校の児童数も30人程度まで減少している。特に本年度は1、2年生の児童がおらず統廃合の声が聞かれるまでになっている。

このような地域の疲弊に危機感を感じた女性たちが中心になって、平成14年に結成されたのが「わいわいkiki」。地域、自治体と住民とのパートナーシップが上手く機能しさまざまな活動を展開してきた。その足取りを取材すべく、活動拠点である「木岐コミュニティホーム」へと向かった。

『わいわいkiki』の多彩な活動

「木岐コミュニティホーム」は、木岐川が港に注ぐ街の中心部に位置していた。平成17年1月に活動拠点として竣工、地域デイサービスや配食サービス、わいわい市場などを行う事務所として機能してきた。その後、平成19年に「食堂のない木岐に、交流できる場所をつくらう」と、厨房部分の機能強化改修工事を実施。毎週水曜日のお昼に地元のおかあさんたちが木岐沖でとれた魚などを材料に自慢の手料理を提供する「わいわい亭」を開店。12m²ほどの厨房に客席16席。こじんまりとしたスペースは、地域の人々が集い交流を深めるのに程よい広さだ。



自慢の味は他地区でも評判



盆踊りを復活



修学旅行の受け入れ



韓国の水産庁と水産団体等の視察

取材に応じてくれたのは、設立当初から事務局業務を担ってこられた坂井久子さんと佐野木時子さん。坂井さんが年度毎の活動をまとめられたアルバムを前にして、これまでの足取りをうかがった。月1回の独居高齢者宅への「配食サービス」の実施、毎月1回の「地区内巡回清掃」や「花壇整備」、毎年4月29日に開催されている満石神社例祭での接待や盆踊り大会、年末・年始を彩る街角イルミネーションの企画・運営、修学旅行生や都市住民に漁業や魚の捌き方を体験してもらおう体験型交流事業……。地域住民のつながりを深める活動から海外からの訪問者の受入れまで、多岐にわたる精力的な活動の数々に目を奪われる。

ところが現在の活動に話が及ぶと、それまでの楽しい表情から一転、静かな口調に。現在定期的に取り組んでいるのは「わいわい市場」と「お好み焼き わいわい」だけとのこと。平成19年にスタートした「わいわい亭」は好評だったものの、平成22年10月から月2回に営業を縮小。木岐地区以外の人で1日料理店

を担ってくれる個人や団体を募る「木岐ワンデイシェフ」制度などいろいろな試みを経てきた。そして現在は第2、第4土曜日の10時～14時に開店、お好み焼きを提供したり出前したりする「お好み焼き わいわい」となった。

こうした紆余曲折の理由は、後継者不足によるところが一番大きいようだ。設立当初からのメンバーが高齢化していくなか、「新たなメンバーの補充を」と、子育てから手の離れた世代を中心に声掛けして回るものの、反応は冷ややかだという。「地域のことは行政に任せっきりにしないうで地域住民も一緒になって取り組む……いわゆる、新しい公共という概念や意義を上手く伝えることができなくて」と、理解を得ることの難しさを語る



アルバムを手に語る坂井さん(左)と佐野木さん(右)



賑わいをみせる「わいわい市場」



平成17年1月に竣工した、
念願の活動拠点「木岐コミュニティホーム」

木岐沖でとれた魚などを材料に自慢の手料理を提供する「わいわい亭」を平成19年に開店

佐野木さん。「世代交代が進まない今、もう大きな企画をしようとは思わない」という、坂井さんのさびしげな言葉が印象に残った。

合併で岐路に立つ行政との連携

行政と住民が二人三脚で地域活性化に汗を流す。そんな「新しい公共」が順調に推移していた「わいわいkiki」の活動が、歯車がズレてしまった理由は何か。この疑問を解決すべく、「わいわいkiki」発足当初から活動を見守ってきた小坂進さんに話をうかがうべく、美波町由岐支所に向かった。平成18年の市町村合併により、新しくできた美波町の役場本庁は日和佐地区に置かれ、旧由岐町役場は支所となった。旧由岐町役場では40人いた職員は大半が本庁へ移行し、支所に残ったのは10人だという。

現在、美波町由岐支所で地域振興室長を務められる小坂さんの説明で、旧由岐町の地域自治支援制度であった「地域担当職員制度」が、旧日和佐町との合併に伴い消滅したことが分かった。この制度は「行政と住民との協働」を目指して、町職員が「担当地区」を受け持ち住民との連携を図るというもの。町内8地区にそれぞれ3～5人の職員が配置され、住民との意思疎通を頻繁に行っていた。行政側は住民の要望をきめ細かに把握することができ、住民側は行政が何をどこまでしてくれるのかを具体的に知ることができたという。

お話をうかがうなかで、合併に伴う人員削減、制度変更によって「わいわいkiki」と行政との関係に変化が生じたことが、活動が縮小した理由の一つで

はないかと感じた。小坂さんからいただいた「わいわいkiki」紹介資料の中に「行政に頼りすぎず、住民が地域を元気に



わいわいkikiのマスクットのアカテガ

する」というキャッチフレーズがあった。地域の主人公は住民だ。ただ、住民がいきいきと活動するためには、行政のコーディネートが欠かせない。必要な助言やバックアップを受けつつ、自分たちで“わいわい”議論しながら活動を組み立てていったからこそ、地域の活性化に貢献してこられたのだろう。

新たな役割を模索して

合併後の新たな動きとして「木岐まちづくり協議会」が結成され、既存の住民グループ等が広く連携し、それに町内会、漁協、婦人会、老人会、PTA等も参加する集落協働体の形で活動が始まった。発足当初は、予想される地震・津波に備えた防災を主眼としていたが、水産庁のモデル事業支援を受けたのを機に、飲食店営業やワーキングホリデー型企画の実施等、活動の幅を広げている。「木岐まちづくり協議会」という大きな枠組みのなかで、「わいわいkiki」がこれまでに創り育んできたものをどのように引き継いでいけるのか。そして、その中でどのような役割を担うことになるのか。それらが見えてくれば、後継者不足という課題も解決され、再び活気を取り戻せるはず。そんな思いを胸に、穏やかな港町を後にした。

【取材・文：竹市直彦】



↑
ブルーベリーたっぷりの「ブルーベリーバル（左）」とお年寄りにも人気の「パンデポンタ（右）」。その他にも、店舗には常時25種類ほどのパンが並ぶが、夕方近くにはほとんどが売り切れてしまうとか。



カンパーニュ、
680円（写真奥）
ブルーベリーバル、パンデポンタ
300円（写真左） 210円（写真右）

愛知県 豊根村

豊根村は、愛知県・長野県・静岡県との県境に位置し、愛知県最高峰の茶臼山（1,415 m）の麓に広がる自然豊かな景勝の地。特産品のブルーベリーは愛知県一の生産量を誇り、冷涼多雨な気候を利用して農業を使わずに栽培されています。

そんな安全・安心な地元産ブルーベリーの酵母を使ったドイツパンを始めとするオリジナルパンが、豊根村自慢のご当地グルメ。手がけるのは、本格的なドイツパンの味が評判の店「ベッケライ ミンデン」を営む山口美知英さん。田舎暮らしの夢を叶えて工房を構えた豊根村に何か貢献できないかとの思いで開発した、話題の3商品をご紹介します。

しっかりと歯ごたえで噛めば噛むほど味わい深い「カンパーニュ」は、そのまま食べても素朴な甘さが後を引く美味しさ。生ハムやチーズ、ジャムなど、どんな具材との相性も抜群で、薄くスライスしてサンドイッチにしてもグッド！「ブルーベリーバル」は、ゴロツと丸ごと入ったブルーベリーの実の食感と甘酸っぱい味が、しっとりしたデニッシュ生地のバター風味＆まろやかなアーモンドクリームと絶妙にマッチしたデザート感覚のパン。パッケージのブルーベリーマークも可愛い。「パンデポンタ」は、もっちりした生地の中に地元名産品の「金山寺味噌」を入れたおかずパン。麦麴のプチプチした食感とごぼうのシャキシャキした歯ごたえが甘めの味噌風味を引き立て、これまたパンと見事にマッチ。いずれも、豊根村を愛する山口さんの豊かなアイデアと確かな技術に裏打ちされた、まさに職人技の逸品です。

【取材・文：白波瀬聡美】

水源の里
発

おすすめ
ご当地
グルメ



↑
本場で修業した山口さんの焼くドイツパンの味を求めて、全国から取り寄せるお客さんも多い。



【お問い合わせ】

ドイツパンの店
ベッケライ
ミンデン

〒449-0404
愛知県北設楽郡
豊根村上黒川
字柿平22

TEL・FAX

0536-85-1234

【営業時間】

10:00～17:00

【定休日】

火・水・木曜

水源の里
発



ハッピークッキー缶 1,100円

高知県 土佐町

土佐町は四国のほぼ中央。「四国の水がめ」と呼ばれ、ブラックバス釣りでも有名な早明浦ダムのある町。標高差のある地形や寒暖差を活かした農畜産業が行われ、特に地蔵寺川南岸の肥沃な土地にある棚田では良質な米がとれます。環境に優しい循環型農業により作られる安心で美味しい「棚田米」の米粉を使った「クッキー」が、今回ご紹介する土佐町で人気のご当地商品です。

作っているのは、土佐町の豊かな自然にひかれて移住したという川村ご夫妻が営む「ぼっちり堂」。「ぼっちり」とは土佐弁で「ちょうどいい」の意味で“大地×作る人×お客さんにとって「ちょうどいい」お店”をコンセプトに、国産、地元、有機栽培、無・減農薬の素材にこだわったお菓子作りをしているお店です。

まずクッキーにたどり着く前に、パッケージ缶のイラストに胸キュン！ほのぼのとした可愛らしいイラストは妻の圭子さんの手書きだそうです。47種類から用途や送る人に合わせて選ぶことができます。

クッキーは「くるみ」「よもぎ」「しょうが」の3種類。香ばしいくるみのカリッとした食感が、ザクザクした歯ごたえの生地にごちよいアクセントを加えた「くるみ」。一口かじるとよもぎの香りがフワッと広がり、口中でホロホロとほどけていく不思議な食感の「よもぎ」。じんわり、こっくり、黒糖で炊いた土佐しょうがの香りと風味がしみ込んだ、どこか懐かしい味わいの「しょうが」。どれも優しい自然な甘さで、素材の良さがイキイキ伝わってきます。ハッピークッキー缶のネーミング通り、食べた人を幸せな気持ちにしてくれる心温まるクッキーです。



↑
地元のとれたて平飼卵と国産小麦をベースに、季節ごとの有機野菜やフルーツを使ったパウンドケーキ（650円）も人気。



【お問い合わせ】

山のカフェ&
おかし工房
ぼっちり堂
〒781-3521
高知県土佐郡
土佐町田井 2679
TEL・FAX
0887-82-0944
【営業時間】
10:00～17:00
【定休日】
水・木曜
http://www.pocchiri.com

【取材・文：白波瀬聡美】

おすすめ
ご当地
グルメ



↑
パッケージのイラストを始め、同封のメッセージカードや包装まで、すべて手作り。心のかもった贈り物として喜ばれています。

協議会だより

▲全国水源の里連絡協議会 事務局
佐伯市役所 企画商工観光部 企画課総合政策係
住所：〒876-8585 大分県佐伯市中村南町1番1号
TEL：0972-22-3486（直通） FAX：0972-22-3124
E-mail：s-suigen@city.saiki.lg.jp
http://www.suigennosato.com/index.htm

トピックス

● 参画自治体が168市町村に

新たに、福島県磐梯町、群馬県上野村に参画いただきました。協議会では、組織の拡大に向け多くの市町村の参画をお待ちしております。

全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、全国の会員市町村に募金箱を設置しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくため、ぜひ募金にご協力ください。

インフォメーション

● 第6回 全国水源の里シンポジウム開催

日本の宝 水源の里 ～日本の元気は水源の里から～

会場：白川町民会館
(岐阜県加茂郡白川町)

【1日目】 11月2日(金) 13:00～17:10

《シンポジウム》

- 基調講演
テーマ：「“水源の里”再生の課題」
講師：明治大学教授 小田切徳美さん
- パネルディスカッション
コーディネーター：法政大学准教授 関司直也さん
パネリスト：山口祥義さん（総務省過疎対策室長）ほか

【2日目】 11月3日(土) 9:00～14:00

《現地視察》

- 水源の里佐見コース
集落営農、佐見とうふ「豆の力」
- 東濃松の里林業コース
木材市場、森の発電所
- ふるさとまつりコース
美濃白川ふるさとまつり見学

同時開催

全国水源の里
フォトコンテスト
表彰式

お問い合わせは、全国水源の里連絡協議会事務局まで

編集部より

読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施しています。アンケートにお答えいただいた皆様のなかから、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「ベッケライ ミンデンのパン3種」か「ぼっちり堂のクッキー&パウンドケーキ」を各2名様にプレゼントします（賞品の指定はできません）。

はがきに、①面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見・ご感想、住所、氏名、電話番号、性別を明記の上、下記宛先『水の源 18号』読者アンケート係までご応募ください。

【10月19日（金）消印有効】



※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた皆様の個人情報、賞品発送以外の目的では使用しません。

『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。

年間購読料：1,000円
(年4回発行)

お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

18号の表紙

和歌山県田辺市「大塔溪谷」

日本で唯一、世界でも珍しい「道」が主役の世界遺産「熊野古道」。その中心である熊野本宮大社にほど近い、川湯温泉の上流に大塔溪谷は広がっています。約8キロにわたってそそり立つ岩壁と起伏に富んだ岩の間を、熊野三千六百峰が一望できる大塔山を源とする豊かで清らかな水が流れています。特にこの付近の奇岩絶壁は筆舌しがたく、四季折々の景観が見事です。

お問い合わせ、
ご連絡先は

〒623-1122 京都府綾部市八津合町上荒木5番地（上林いきいきセンター）
綾部市水源の里・地域振興課
TEL 0773-54-0095 FAX 0773-54-0096 E-mail: suigen@city.ayabe.lg.jp

上流は下流を思い、下流は上流に感謝する

第6回 全国水源の里シンポジウム

日本の宝 水源の里

岐阜県 in
白川町

日本の元気は水源の里から

平成24年

11月2日(金)
13:00~17:10

基調講演

講師／明治大学教授

小田切徳美氏

テーマ：「“水源の里”再生の課題」

11月3日(土)
9:00~14:00

現地視察

美濃白川

ふるさとまつり見学 ほか



水の源 第18号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成24年8月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは
水源の里を
応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長	玉川福和
全国農業協同組合連合会・代表理事理事長	成清一臣
全国森林組合連合会・代表理事会長	佐藤重芳
電気事業連合会・会長	八木 誠
独立行政法人水資源機構・理事長	甲村謙友
社団法人全国浄化槽団体連合会・会長	上山健治郎
一般社団法人全国清涼飲料工業会・会長	菊地史朗
社団法人大分県薬剤師会・会長	安東哲也

(敬称略)